

岩井弘融

裏社会を開拓した孤高の旅人

田中智仁

仙台大学体育学部 准教授



岩井弘融先生(1919~2013)は、1947年に東京大学文学部社会学科を卒業後、東京都立大学、大正大学、東洋大学等で教鞭をとり、日本犯罪社会学会会長、白山社会学会会長、日本社会学会常務理事等を歴任された。社会学の幅広い見識をもちながら、とりわけ、犯罪社会学と社会病理学に多大な功績を残した泰斗である。

たとえば、『社会学史概説』(芦書房、1961)、『犯罪社会学』(弘文堂、1964)、『社会学原論』(弘文堂、1972)は、理論の手引書として多くの社会学徒の道標となった。

一方で、岩井を理論の側面だけで語るのは不適切である。なぜなら、岩井の研究は「犯罪」や「社会病理」を切り口にしながら、緻密な調査に基づいて社会の根幹を究明しようとする気迫に満ちているからだ。その真骨頂であり、ヤクザ研究の金字塔といわれるのが、『病理集団の構造——親分乾分集団研究』(誠信書房、1963)である。

同書は辞書と見間違えるような厚さだ。存在感に圧倒されながら頁をめくると、そこには膨大な質的データがある。まさしく、「その〈重み〉は、1.3kg、810頁という物理的ボリュームにあるのではない。むしろ、常人では接近さえ困難な対象と取り組み、ただ一人孜孜として丹念に、13年もの永きに亘る調査に耐えた学問的執念とタフネスによるものである」(小関、1964)と評されるように、調査に向き合う岩井の真摯な姿勢がよくわかる。

それでは、岩井はどのように調査を行ったのか。まず、調査期間は1948年から1960年までに及んでいる。調査対象者と接触するために、主に調査期間の前半は九州、後半は関東を動き回った。多くの無駄や手間、そして足を使って現地を訪問したのである。交通機関が高速化していない時代の旅路で、心身の負担も大きかったことだろう。単独調査であるがゆえに「孤高の旅人」である。

また、特定の調査対象者と長期間にわたって接

触しすぎると、不都合も生じやすいので、できるだけ多くの人間に接する方法を採らざるを得ない。そのために、調査期間を長めに設定する必要があったと説明されている。すなわち、質的な面接法でありながら「広く浅く」の方針にしたのである。

最終的に、調査対象者数は直接・間接を含め297名、直接対象者に限ると56名となった。あらかじめサンプルを決定することは不可能であり、「調査過程の進行に従い、その範囲を拡大し、この結果に達した」(25頁)という。典型的なスノーボール・サンプリングである。

ただし、ラポールの形成に腐心する調査対象なので、接触の頻度や程度に多様性がある。5、6回の反復的な面接もあれば、1回限りの面接もある。面接時間も2時間から7時間までの幅がある。さらに、調査初期は事前に質問を準備したが、中期以降は大きく5、6問に絞る方針に転換している。つまり、調査対象者の特性を鑑み、構造化面接から半構造化面接へ切り替えたのだ。これは「統一性がない」のではなく、「最適な方法を模索した結果」として評価すべきである。

その成果である同書は、ヤクザという特殊な調査対象のミクロな関係性に特化したものではない。岩井が「犯罪集団を単に犯罪集団として取扱うだけでなく、さらにひろくこれを民族社会地盤においてその文化や制度との深い関連づけにおいて把握しようとするものである」(5頁)と述べるようにマクロな視角なのだ。

岩井は執念で裏社会を開拓すると同時に、日本社会の根幹を巧みな調査で明らかにした。その労作は質的調査の模範として今後も輝き続けるだろう。

文献

小関三平、1964、「(書評)岩井弘融著 病理集団の構造——親分乾分集団研究」『社会学評論』14(4):82-85。

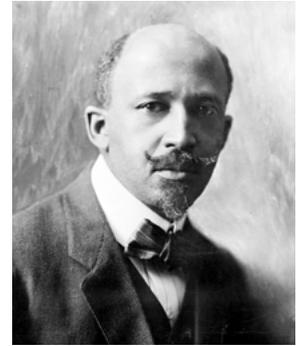


Column
調査の
達人

W・E・B・デュボイス

辻 正二

保健医療経営大学 特任教授 / 山口大学 名誉教授



今日、世界の偉大な思想家の一人とされるW・E・B・デュボイス(1868~1963)は、アメリカにおける黒人解放運動の理論的指導者、思想家として有名である。だが、社会学者としての彼を知る人は少ない。

デュボイスは、アメリカのマサチューセッツ州グレート・バリトンで生まれ、17歳でフィスク大学、20歳でハーバード大学に進学し、1896年には黒人として初めての博士学位をハーバード大学から授与された。その後、アトランタ大学などで教鞭をとり、黒人の都市コミュニティを中心とした社会学的な調査・研究をしたが、しだいに黒人解放運動に専念するようになった。晩年は、ガーナ共和国のエンクルマ大統領の依頼でガーナに渡り、『アフリカ百科事典』の編纂をして、その地で亡くなった。

デュボイスには多数の著作があるが、『黒人のたましい』(1903)、『フィラデルフィアの黒人』(1899)などが代表作である。『フィラデルフィアの黒人』は、1896年から1897年の15ヶ月間、フィラデルフィア7番街に住んでいる黒人たちに対して、家族、個人、家屋、街路、組織と制度などの状況について調査した結果にもとづいている。彼は、調査や公式統計で得たデータを統計的に分析するだけでなく、事例研究や参与観察的な方法を頻繁に利用して分析している。例えば、「house to house inquiry」とデュボイスが呼ぶ方法では、7番街区の個人や家族に対して、平均一戸当たり15分から25分の時間をかけて戸別訪問型の調査を行っている。また、飲酒状況の分析では、一定の時間内に酒屋に来る客数を分析するという手法を採用するなどした。

本書において特筆すべき点は、失業、貧困、アルコール中毒、犯罪、家族崩壊、人種偏見などを鮮明に描いてみせたことだろう。また、黒人の家族を4つの階級に分けて分析した考察は、W・L・ウォーナーやリンド夫妻の階級に関する研究に先行している。この考察で黒人ブルジョワ層の特異な階級的な存

在を明らかにした点や、移民や移住者が時系列的に地域移動する動態を分析した視点などは、当時としては傑出していたと言

えるであろう。しかも、黒人の教会や自発的な結社の機能主義的分析、選挙権に関係した政治クラブの分析などでは、後年主流となる集団論的な手法で考察しているのである。

このような彼の方法論からは、一貫した実証主義的な精神を読み取ることができる。ただ、デュボイスは、こうした方法論にとどまらず、黒人の生身の現実を把握しようとした。このことは、数量的な考察に終始するのではなく、「house to house inquiry」という参与観察的な方法や事例の分析を採用したことからも伺える。

シカゴ学派による代表的な都市研究が著されたのは、1920年代のことである。『フィラデルフィアの黒人』はそれよりもほぼ20年近く先行した研究であったが、当時、シカゴ学派によって正当に評価・言及されることはなかった(ウエーバー、ミュルダールには評価された)。その理由は、彼の考察対象が黒人社会に限定されていたこと、既存の社会学の枠組をあまり利用しない独創的な研究スタイルであったことが関係しているかもしれない。「忘れられた社会学者」(ルドヴィック)として紹介されたデュボイスの研究は、1970年代の黒人社会学者による黒人社会学の構築に多大な影響を与えるものの、我が国では紹介されることは少ないまま、今日に至っている。